

さらば夏の光りよ

美しい日和はあと幾日つづくのだろう。

夏の終り，日のおわり。

人は去る，私達のさしのべた手，優雅に，またうちおののき，

人は去る，またの日の想いのなかで。

ぼくはむしろ数学というよりも，それを考えているときのあの独特な緊張感が好きだった。大学にはいった年，そうすることが必要だと思いこんでいたぼくは，いつもひとりにしていた。寮の古い机にむかってよく読んでいたファンデルヴェルデンの本のページには，拙い書き込みとともに紅茶の茶色いしみが残っている。そのときからすでに数学自身より，それによって引き起こされる一種の雰囲気を楽しんでいたのかもしれない。人との距離が遠くなるのに比例して，自分のまわりの何でもないものたちが自分にまとわりついてくるのだろうか。そうしてできたぼくの京都に対する感じ方は，あるいは数学に対するそれは，その後何年にもわたって，新たにつけ加えられ，あるものはごちゃまぜになり，あるものはきれいに色分けして整理されてきた。

夏の日，多くはその夕方にぼくがきまって歩いていた吉田山をめぐる道を思う。宗忠神社の石段。真如堂の本堂裏から黒谷の文殊の塔への秘密の道。そこからは大文字山がよく見えた。こうしてぼくは，そのときわかった問題や思いついた命題に名前を与えてはつみあげ，またくずしては消していくことを楽しんでいたのだろう。

季節はいくたびもくりかえす。そして，人の心はおなじ道をいくたびもさまよう。季節はちがはない風や雲を用意した。そしてすべての草木は花をつけた。いくたびもくりかえして，とぼくらは言う。なにかしらたいへんにとおい。そのようなところから，たった一度だけのことがいくたびもくりかえされる。ぼくらはたいへんによく知っている。しかし，すべては何かしら新しい。むしろ苦しみにまで近く強い。

ぼくにはたったひとつわからないことがある。時はなぜこのようにくりかえすのか。そしてなぜぼくにひきとめられずにすぐ死に絶えるのか。おまえはいつもその問いであり答えであらうとする。

祇園祭りの宵山から送り火の日までの一ヶ月、少しずつかわっていく夏の勢いをぼくはで
きるかぎり先取りしようとした。こういうものの感じ方はいつのころからだろうか、きっと
ぼくの本質的な部分であり、今はじまったばかりの数学にしたっておそらく、そんなみかた
をしているにちがいない。そして、日がたつにつれて、ぼくの中ではこんな問いが大きくな
っていくのだ。

「おまえはもっとほかに感じなければならないことがあるのではないか？」

夏の終わり、これから毎年のようにその問いに悩まされながらも、ぼくはきっと数学と訣別
することはできないのだろう。それは第一にこういうすべての気持ちをひきおこす数学と
いう触媒の鮮やかさが大切だからであり、第二に今はもうない吉田西寮のうす暗い部屋に
ひとりでいる七年前のぼくの姿があるからだ。

星ひとつ、木の葉ひとつが落ちてもお前がいっしょに滅びるようでなければならない。
そうになったら、お前もすべてのものといっしょにあらゆる時によみがえるだろう。

1990. 10. 7

(文中引用：津村信夫，立原道造，ヘルマン・ヘッセより)